恋する乙女は悪魔っ子！？

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する乙女は悪魔っ子！？

【Ｎコード】

Ｎ８２２４Ｘ

【作者名】

三月語

【あらすじ】

何処にでも居そうな普通な、しかし異性が苦手な少年、榊敏豪。彼が容姿端麗・優秀な少女の、口外できない秘密を知った時、彼の学園生活は波乱に満ちたものとなった・・・

初の一次です！至らないところも多々あると思いますが宜しくお願いします！指摘等ありましたら感想でどうぞ。

そのいちっ！　助けた女の子は・・・（前書き）

※この物語はフィクションです。実在の人物、団体とは一切関係がありません。

初一次です。見苦しいところもあると思いますが、そこはご了承ください。

後、今までとは書き方を変えております。私の「二次」を見ていた人にとっては『代筆？』と思われるかもしれませんが、ちゃんと自分で書いてます。

そのいちっ！　助けた女の子は・・・

・・・一体何がどうしたらこんなことになるんだ・・・？

目の前には学校一の美少女って言われる代永がいる。・・・苦手な異性が。

・・・何で俺がこんなことしてんだ・・・？

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

〜　朝　〜

「でさ、沢木のやつボール踏んで一回転したんだぜ？」
「バカじゃね？ってことはよ、着地まできっちりこなしたのか？」
「当然！満場一致で１０点あげたからな」
「１０点１０点１０点・・・ってか？そりゃ俺も見たかったぜ・・・」

朝、歩いて登校する二人の男子。片方は俺、榊敏豪。隣にいるのは俺の・・・悪友？の桐生一樹。

昨日、一樹の所属しているサッカー部で起きた面白出来事について話していたわけで。

「そっちはどうだ？ちったあ楽しめる部活だったか？」

「全然。パソコンを使うと言うよりどっか走り回るのがメイン、って感じ。運動部かよって」
「なんでコンピ部が走り回るんだよ・・・」
「部活の写真撮影だってよ。学校のＨＰの部活動紹介に使うんだってさ。まったく、いい迷惑だよ・・・」

で、ちょっと歩いて行ったら・・・

「・・・お」
「どうした？」
「あれ見ろよ。うわ、間近で見たの初めて見た」

顎で示された方を見たら・・・女子？

「なんだよ、いつもの癖か・・・」
「癖ってなんだよ癖って！つかあの子代永じゃん！学校一の美人って言われてる代永咲夜華じゃん！やべ、マジ可愛い・・・」
「・・・ったく、どうせ鼻の下伸ばしてたりするんだろ？お前の変態癖って何とかなんないものなのかねぇ？」
「・・・たくよぉ、お前は・・・ってそう言えばお前女嫌いだったんだっけ」
「そうだよ、悪いか？」
「・・・悪ぃ、すっかり忘れてた。ホント悪ぃ」

・・・俺は過去・・・小５の頃に女子に思いっきし弄られてから女

子嫌いになった。今もまだ女子に近づきたくもない。それくらい毛嫌いしている。

「ま、お前が明らかに好意を寄せているってのはよーく分かってるからよ、安心しな。からかいくらいはしてやっから」
「最低だな、おい。でもそれがお前のいいところなんだよな」

お互いに色々と皮肉り合いながら教室に向かった。

―そして放課後―

「くっそ、野球部どこで活動してんだよ！！」

俺は部活動で校舎の外を走り回っていた。野球部が見当たらない！！何処だっけ！？

「あっちはまだ見てなかったはず・・・ん？」

ふっと道を見たら、代永が一人歩いているのを見た。・・・親衛隊は・・・いないみたいだな、珍しい。

「・・・何してんだ、アイツ？」

見ていると代永はふらふらとしている。・・・なんか気を抜いたらぶっ倒れそうな・・・

「って倒れかけてる！？」

慌てて俺は駆け・・・寄ろうとしたが体が動かない。

「・・・くそっ・・・こんな時に異性恐怖が・・・！でも・・・止まってられっか・・・！」

相手が異性だって関係あるか・・・！

何も考えることなく、俺は代永の元へ走り始めた。

☆

★

☆

★

☆

★

☆

★

☆

★

☆

★

☆

★

―そして今―

「よ、代永！おい、大丈夫か！？」
「ぁ・・・ぅ・・・・」

・・・よかった、まだ意識はあるみたいだ・・・

「・・・一体・・・どうした・・・？」
「・・・が・・・・・・い・・・・」
「・・・？」

な、なんだ・・・？何て言ったんだ・・・？

「・・・血が・・・ほしいよぉ・・・」

そのいちっ！　助けた女の子は・・・（後書き）

次回は秘密が明らかに。

更新は不定期ですので、更新催促はしないでください。

後、荒らしは絶対厳禁です。即時消しますので。

そのにっ！　助けた女の子は吸血鬼！？（前書き）

第二話です。なんとなく連投してますが気にしない方向で。

今回は咲夜華の秘密が明らかになります・・・というかタイトルで分かるかと。

そのにっ！　助けた女の子は吸血鬼！？

「・・・は？」

代永のやつ・・・何言ってんだ？「血が欲しい」とか・・・吸血鬼じゃあるめぇし・・・

「代永？おい、気は確かか？」
「血が・・・ほしいよぉ・・・」

・・・これ、冗談抜きで考えるべき？本当に吸血鬼って考えるべきなのか？

「・・・代永、鞄の中見るぞ！」

俺は代永を抱きかかえたまま、何かないかと彼女の鞄の中を開けてみた。・・・が、中に所謂輸血パックとかそういう類は・・・ない。

・・・マジでどうするんだよ、これ・・・

「・・・あ・・・」

・・・気がついた、か？

「・・・血・・・ちょうだい・・・」

なんか代永が俺の首に近づいてきたんだけど・・・ってもしかして！？

「・・・いただき、ます・・・」

・・・かぷって・・・噛みつかれて・・・

「うおおおおっ！？な、なんじゃこれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ・・・」

な、なんか、色々と吸われていく・・・感じ・・・が・・・

「・・・はふぅ・・・お腹いっぱいぃ・・・・♪・・・・あっ！？ま、
また・・・またやっちゃった・・・」

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・？」

目が覚めたら、見知らぬ天井・・・なわけなく、保健室の天井が見

えた。

・・・あん時、代永に首に噛みつかれた・・・というか・・・多分ホントに血を吸われたんだと思うけど・・・気を失ったんだっけ・・・

「あ、目が覚めた？」

「・・・よ、代永！？」

声がした、と思って横を見たら代永がいた。・・・また噛みつかれたりすることないよな！？

「な、何もしないよな・・・！？」

「その・・・ホントにゴメン！」

パン！と手を合わせて代永が謝る。

・・・あれ？

「・・・ところで・・・あのさ、代永？」

「な、なに？」

「お前って・・・一体何者なわけ？「血が欲しい」って言ったり首に噛みついたり・・・まんま吸血鬼そのものな感じだけど？」

「そ、それは・・・その・・・」

代永は言いたくなさげにごにょごにょと口ごもった。

「言いたくないなら言わなくてもいいけど」
「え、えと、その・・・ね？あまり他の人に言ってほしくないんだけど・・・」

言いたくないようなことを無理して言うようにポツリ、ポツリと言い始めた。

「私・・・吸血鬼なの」
「・・・は？」
「だから、私は吸血鬼なの！」
「吸血鬼ていうと・・・ヴァンパイアとかそういう類？」
「・・・うん」
「ヴァンパイア・フィリアとかじゃなくて純粋に？」
「さっきからそう言ってるよ」

最初は冗談かなんかだろうって思ったけど、聞き返した時に断言したってとこから冗談とかじゃなくて、目の前にいる女子が本物の悪魔・・・。

確認でヴァンパイア・フィリア、別名吸血病（聞いたことがあるだけ。血を好む嗜好だ、とか血を飲まないと気が済まない、とか・・・）を疑って聞いてみたけどそれも違う。

目の前にいる女子は、紛れもなく吸血鬼なのだ。

「・・・なんとなく納得できるようなそうでもないような・・・」
「絶対に知られちゃダメって、お母さんにきつく言われてたんだけどね・・・高校入ってすぐばれちゃった・・・」

あはは、と笑う代永。しかしその顔はどこか悲しげだった。

「・・・で？どうしたいんだ？口封じでもするか？」
「そ、そんなことしないよ！ただ黙っててもらえればそれでいいし、私にそんな力ないもん！」
「ちょ、ストップ！近づかないでくれ！」

ズイッと体を乗り出して近づく代永。俺はそれを体を大袈裟に遠ざけてまで拒絶する。

・・・やばい、鳥肌が・・・

「・・・どうしたの？」

すぐに言った（というか叫んだ）のが幸いしてか、すぐ離れた。鳥肌が立っていた。

「・・・悪い、俺異性が苦手なんだよ・・・つか嫌いレベルで・・・・あ」

途中まで言ってあることに気付いた。

「だったら、俺の異性嫌い直すのに付き合ってくれないか？」

等価交換の原則、とでも言えばいいのか？この提案なら乗ってくれると思う。

別に「恋人になってくれ」とか、ものっそいエロい事を言ってるわけじゃないし。こっちは黙っておく、ってだけだと代永が拒否しそうだしな。「榊君に苦労ばっかりさせられないもん」とかいって。

「それなら・・・いいよ？・・・・よかった、えっちぃことしてくれ、って言われるかと思った・・・」

・・・なんで同じことを考えてんだよ代永のやつは。

「・・・あのね、榊君」

「・・・なんだよ」

「榊君って・・・前私を助けてくれたりしなかったっけ？」

「・・・知らね」

「・・・そう、だよね。こんな都合よくその人がいるわけ、ないも

んね」

突然聞かれたことにそっけなく答える俺。

・・・気のせいだろ。俺も代永のことどっかで見たことあるような・・・なんて思ってるけど。

「・・・それとさ、友達に・・・なってくんねぇかな」

「友達？」

「俺、こんなだから、異性の友達いなくてさ・・・」

「友達・・・うん、いいよ！私も欲しかったんだ、気軽に話せる男の子の友達！」

突然代永が俺の手を握ってきた。それはそれは嬉しそうに・・・って！！

「うおわぁぁあっ！！だ、だから手を握ったりしないでくれ！と、鳥肌が、鳥肌が立つから！！」

「あ、わ、ご、ごめん！」

俺が怒鳴る勢いで言うと代永はすぐに離れてくれた。

こうして、吸血鬼の女の子とのギブアンドテイクな感じの生活が始まった。可愛くて親衛隊すらあるって言われる吸血鬼な女の子と、普通って言われてもおかしくない異性嫌いな男、つまり俺との。

・・・一体、何があるんだろうなぁ・・・というか幸先不安だなぁ・・・

そのにっ！　助けた女の子は吸血鬼！？（後書き）

次回は親衛隊（笑）が登場します。

この親衛隊（共）、自分でもネタキャラにします。ついでに言うとこいつら、所々出てきます。次話以降。

あ、空鍋とかは出てきませんので。ヤンデレキャラを出さない・・・つもりです。空鍋を出さないことは公言しておきますが。

そのさんっ！　代永咲夜華親衛隊の恐怖（前書き）

この小説最大のネタキャラ軍団、親衛隊の登場です。キモかったり笑いのつまみになったりなど、お好きな扱いでどうぞ。

そのさんっ！　代永咲夜華親衛隊の恐怖

「敏豪、今朝フラフラしてたけど一体何があった？」
「・・・気にすんな、昨日寝るのが遅かっただけだよ・・・」

朝、いつものように一樹と歩いていた。

「ま、気にしないでおいてやるよ」
「助かるぜ、とっつぁん」
「バカ、まだ老けてねーよ！まだピチピチの１５歳だっつの！」
「・・・わり、さすがにそれは引くわ・・・」
「・・・すまなかった・・・」

お互いからかい合いながら（最後は見事にすべらかした一樹に引きながら）校門をくぐって玄関に着いた時だった。

「あ、榊君おはよ♪」
「お、おう・・・おはよう、代永・・・」

玄関ですれ違った代永に挨拶され、俺も（半ば怯えながらに）返した。それを一樹にしっかりと見られていた・・・

「・・・なぁ、敏豪」

「・・・なんだ？」
「お前いつ代永と仲良くなったんだ！？昨日まで挨拶されることもなかったじゃねぇかよ！！」
「昨日転んだ所に俺がいて下敷きになったのを助けられたと思われたんだよ、それ以外に何かあるのか！？」

一応あのことは伏せておいた。代永との約束だし。

「・・・お前、今日が命日になるかもな・・・」

・・・今日って・・・ああ、そう言えば代永には親衛隊がいるっていってたっけ・・・。・・・さらば、俺の人生。

「敏豪、俺はお前と共に死んでやるからな、だから安心して死んでこい」
「・・・どうしてだろう、目から汗がだらだらと・・・」

正直、一樹の心ないような気遣いが心に染みたその瞬間だった・・・。道連れ大歓迎だが、先に死ねっていうのは・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「貴様っ！我らが姫を誑かしたな！？」

そして悲劇は起きた。マジ悲劇。どうしようもないくらい悲劇。はっきり言おう、これが今後の俺の学校生活の障害になった。階段登ろうとしたら踊り場に変人がいた。

「・・・なぁ、もしかしてあれ・・・」
「もしかしてももしかしなくてもあれだな、というか「我らが姫」って・・・」
「「・・・ぷっ」」
「笑うな！！」

俯いて笑いをこらえる俺と一樹。・・・いや、だってな？一人称「我」って今まで聞いたことないぞ！？しかもポーズがキモい（俺達に向けて指をビシッ！と突き付けている。脚も変にクロスさせて・・・なんかキザっぽい感じでやってるけど・・・如何せん基盤がキモいからキモさも当社比三割増し）！んでそれが笑いを助長させてんだよ！！

「ええい、そんなことはどうでもいい！榊敏豪（びんごう）！今すぐ我らが姫から離れろ！！」
「・・・なぁ、今・・・」
「明らかに名前間違えたな。というか普通は敏豪（としひで）って呼ばないけどな」
「・・・シャラーップ！！」

・・・どうしよう、冗談抜きで我慢の限界きそうな・・・

「・・・面倒だしスルーしようぜ、スルー」
「そうだな、こんな奴に構って遅刻とか恥以外の何物でもないしな」

俺達は階段を上ってさっきから「ビシィッ」と指先をこっちに突き付けたままのポーズをとった変態（笑）を大袈裟に避けて進む。
・・・第一こんなのと関わっていたら一体どれだけの俺が笑い死ぬか・・・

「・・・・・・」

そして変態は呆然と立ち尽くす。何一つ言葉を発することもしない。
・・・ザマミロ。

「き、貴様！我らを敵に回してこれで済むと思うなよ！！」
「あーはいはい。敵にでもなんでも勝手に回せー」

後ろからあの変態の「ぐぬぬ」という声が聞こえたが、俺達は一切合切無視して教室へ向かった。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

教室に入ってからも悲劇は続く。

・・・つか親衛隊って、こんなにいたのね・・・

「「「「殺せっ！！」」」」

「開口一番に「殺せ」って！たかが挨拶だろうがよ！！」

「さすが親衛隊、自分達がされないことを他人がされると途端に殺戮マシーンに早変わり・・・」

俺は教室から走って逃走、それを追いかけ始めた親衛隊、総数１５人。全員釘バット所持がデフォルトなのはご愛嬌。

「我らが姫を誑かす輩はーっ！！」

「「「Ｓｅａｒｃｈ　ａｎｄ　Ｄｅｓｔｒｏｙ！！見敵必殺！！」」」

「だからなんで殺されなきゃならねえんだってのーっ！！」

ちなみに俺は始業ベル直前で先生に保護してもらえた。親衛隊の奴らは皆説教。・・・通称『生徒指導室の化け物教師』に・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・さすがに昼に現れるなんてことはないだろ」

「だよな。代永はいねぇし、落ち着いて飯も食える・・・あ」

鞄を開けて気付いた。朝、昨日のことでグロッキーになっていたから昼飯作ってくんの忘れた・・・

「・・・一樹、悪ぃ。先に飯食っててくれ。購買でパン買ってくる」
「おー、気をつけてなー。くれぐれも代永に会って話したり親衛隊にあったりするなよー」
「うーい」

一樹の忠告を背に教室を出た瞬間だった。

「発見、我らがＥｎｅｍｙ！！」
「うわ、ダサっ！何処の日本語習いたてな外国人だよ！！」
「捕まえろ、そして殺せ！！」
「捕まるかっての！！」

そして第二次逃走劇が始まった。・・・なんか朝より人数増えてる気がするんだけど！？

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・はむっ」

教室の、自分の席（隅っこ）で女子が一人、黙々と弁当を食べていた。

「・・・代永、咲夜華・・・。魔族類に該当する可能性大・・・尻尾を掴み次第討魔を開始する必要あり・・・なのです・・・あむ」

何やら物騒なことを言っていた・・・が、その後の一言が物騒さを

打ち消してしまっていたのはご愛敬だ。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「な、何とか、撒いた、か・・・」

購買で、俺は一息ついていた。親衛隊の奴ら、便所を上手く使って逃げ切ることが出来たようで・・・

「あれ、どうしたの榊君？」

「・・・マジで？」

声をかけられてそっちを見た時、そこにいたのはもう一つの危険因子（俺的に）、代永だった。

親衛隊の奴らは・・・きっちり撒いたな、いない。

「・・・親衛隊の奴らに・・・追われてたんだよ・・・」

「親衛隊？」

どうやら代永は親衛隊の存在は知らないらしい。・・・というかあんな馬鹿騒ぎしていて全く知らないってのもどうかと思うんだが。

「・・・気にすんな。ホントなら飯買いに来ただけなんだよ・・・」

「そっか。その親衛隊って人達に気をつけてね？」

「・・・気をつけるよ・・・」

適当にサンドウィッチを二つ買って立ち去る俺。いつまでも代永と一緒にいたら何ればれるからな・・・居場所。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

放課後。あいつらは本当にしつこかった。

「榊敏豪ぇっ！！本日昼、姫と会って話をしたというのは本当かっ！？」

「・・・敏豪、マジか？」

「・・・購買行ったら偶然・・・というか元はというとお前らなん

だよ！！お前らが追いかけ回したりしなきゃ何事もなかったんだっつーの！！」

生徒玄関を出て数メートル歩いたところで・・・奴らの群れと鉢合わせ。・・・つかいつ昼に会ったのを知った？俺誰にも言ってないぞ？

「問答無用！我らの姫を汚す輩は・・・死してその罪を償うべしぃっ！！」
「だからって簡単に死ねるかよぉっ！！」

恒例釘バット軍団が突撃しようとしたその瞬間だった。

「あれ、これって一体何？あ、榊君も」

彼らにとっての姫、俺にとっては・・・救世主・・・とでも言うのか？代永がいた。

「ひ、姫・・・」
「今日も・・・神々しい・・・」
「ああ・・・これで何時死んでも・・・いい・・・」
「え、えーと・・・どういう・・・こと？」

突然ひれ伏したり崇めたりなどなど、なんかよく分からない行動（というかあいつらにとっては崇拝している感じだが）に代永は困る。

「・・・昼に言ってた親衛隊だよ。代永の。」

「え、えぇっ！？わ、私の！？そ、そんなの困るよ・・・」

本当に困り果てた様子の代永。しかし目の前にいる連中は行動を止めようとしない。

「代永、解散っていってみたら？」

一樹が助け船を出した。簡単に言えば、崇拝している奴らなのだから、『解散』とでも言えば散る、という考えだ。

「え、えと・・・か、解散！」

代永が恥ずかしそうに「解散」というと・・・

「「「了解しました、姫様！！」」」

「ひ、姫！？」

盛大な崇拝ボイスと共に軍隊さながらの解散を見せた。というか靴

音を揃えて立ち去る奴らを初めて見た。

そして去り際の「姫」発言に代永は困っていた。

「・・・姫・・・そんな大層な人間じゃないよぉ・・・」

・・・否、照れていた・・・

そのさんっ！　代永咲夜華親衛隊の恐怖（後書き）

今回ちょっぴり出てきた、ちょっと特徴ある口癖の女の子。彼女は２話ほどくらいで大きく関わってきます。なんとなーく雰囲気はあれですけど。

一話あたりの文字量は大体１４００～５０００の間にするつもりです。少ないなどあるかもしれませんが、そこは勘弁していただけると幸いです。

そして最後に。

急展開過ぎる展開は、目をつぶって頂けると嬉しいです！！

そのよんっ！　進展した（？）二人の距離（前書き）

さて、何が進展したのか？それは本文を見てからのお楽しみ、です。

そのよんっ！　進展した（？）二人の距離

相変わらず親衛隊共に追われて追われて・・・な間の昼。

「・・・ちくしょう、パンは確保できたけど場所が確保できねぇって・・・」

廊下をぶつくさ言いながら歩く俺。教室には戻れない。戻ったところであいつら・・・親衛隊がいる。さっきも「姫から離れろ軟弱者めが」とか言われて追いかけ回された。・・・軟弱者て・・・

「・・・しゃーなし、だな。屋上で飯食うか」

昼だけこっそり開放されている屋上。そこなら誰も来ないだろうと思った俺は屋上へと繋がる階段を上っていった。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・お邪魔しますよーっと・・・」

誰もいない（はずの）屋上のドアを、「お邪魔します」なんてふざけて行ったら・・・

「へっ！？」

・・・いきなり声が聞こえた。女子の。うわ、最悪。

「・・・って、榊君か・・・」

「・・・なんでここに代永がいるんだよ」

「ここにいると落ち着くんだ。誰もいないし、のんびり空を見れるから」

「・・・なるほどな」

俺は金網にもたれて座り込んだ。

「あ、そこ汚いよ？ちょっとずれるから一緒に座らない？」

さすがにそれはまずいと思ったらしく、代永は俺の手を掴んだ。

「ちょ、まっ、待て！！い、いきなり掴まれると鳥肌立つ！！」
「え、あ、ご、ごめん・・・。で、でも、こうやってかないと異性恐怖症・・・だっけ？治らないよ？」
「とか言って急いだってすっと治るもんじゃないだろ！？」
「こういうのって少しでも強引な行動しないと治らないって聞いたよ！？」
「強引にやって逆に悪化したらどうすんだよ！！」

お互い譲らずの言い合いは、結局俺が折れる形となって終息した。

「・・・ダメだ、やっぱり鳥肌が・・・」

「我慢しないと！大丈夫だよ、その内慣れるって。・・・あふぅ・・・」

突然代永が変な声を出した。

「代永？」

「・・・え、あ、ご、ごめんね？変な声出しちゃって・・・・」

一体何かあったのだろうか？と、心配そうにしていたら・・・

「・・・実は・・・ね？あの時榊君の血、飲んじゃったでしょ？そしたら・・・榊君見てたら血が飲みたくなっちゃって・・・・てへ♪」

「いや、てへじゃないだろてへじゃ」

舌をちょろっと出して可愛らしく「てへ♪」と言う。しかしそれは俺にとっては死刑宣告間違いないわけで。

「・・・ダメ？」

「ダメに決まってんだろ？俺の命にも関わるし、下手にやってばれたらどうすんだよ？」

「ちょっとだけ・・・ね？ホントにちょっとだけだから・・・お願い！」

「・・・ちょっと待て・・・」

俺は辺りをきょろきょろ見渡してみる。・・・親衛隊の奴らはいない、ここは俺と一樹しか知らないし、一樹は教室で飯を食ってるからいない・・・大丈夫、か？

「・・・しゃーねー。こういう時だけだからな？ホントは絶対吸わせねーんだけどな」
「ありがと！じゃ、いただきまーす♪」

しかし・・・吸われるってのは・・・いい気分じゃねぇ・・・な・・・

・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・はふぅ・・・ごちそうさまでした♪」
「・・・お、お粗末さま・・・でした・・・」

ちびちびと、だったが・・・たっぷり2分、吸われた・・・。その2分間はとても俺に耐えられる時間じゃなかった・・・。鳥肌が立っているし、実質今気を失いそうだから・・・

「さ、さっさと戻るぞ。授業に遅れるのは絶対にいけねぇしな」
「そだね。じゃ、戻ろっか」

にこにこと先を行く代永と、ちょっとやつれた感じの俺。二人で教室に戻った。親衛隊の奴らには見られてなかったのは救いだった。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・尻尾、掴んだのです」

屋上の給水タンクの陰で、少女が呟いた。彼女は終始二人の行動を見ていたのだ。それはまるでストーカーさながら。

「・・・今日の放課後、一気に滅してあげるのです・・・代永咲夜華・・・」

そのよんっ！　進展した（？）二人の距離（後書き）

ちょっと敏豪が異性嫌いを克服しようとした一瞬でした（咲夜華に血を吸わせた、という行動が、です）

次回はちょっとバトル入りまーす。ほんのちょっとでーす。

「そのさんっ！」から出てるなーんか祓魔師っぽいよーな女の子については、次回正体が分かります。ちなみに祓魔師としてはあり得ない存在なのです。

プチ問題。

敏豪の名前には元ネタがあります。さて、その元ネタとは？

・・・別に正解しても特に何かあるわけではないので、答えたい人だけ答えてみてください。正解は「そのごっ！」で。

そのごっ！　会合、祓魔師の少女（前書き）

ついに動きます、祓魔師（？）の少女。彼女の正体とは一体？本当に祓魔師なのか？それとも・・・？

それは本編で。

ちなみに前回の答えも、後書きでちょろっと載せます。

そのごっ！　会合、祓魔師の少女

「・・・部活・・・終わった・・・！し、死ぬかと・・・思った・・・」

今日も今日とて写真撮影のために走り回らされた・・・そんな部活。それが終わってへとへとになって生徒玄関に行って、ある事を思い出した。思い出したくないことを、だ。

「お袋に買い物頼まれてた・・・」

軽く落ち込んで諦めて外に出たら・・・

「榊君、部活終わったんだ。・・・あれ？どうしたの、落ち込んで？」

・・・まるで待ってたように代永がいた。・・・というか出たとき偶然代永に鉢合わせした、といった方が正しいかも。

「・・・代永、お前って俺のことつけてねーか？ホント偶然っていう言葉が似合わないくらいに会うんだけど・・・・」

「気のせいだよ？私も最近よく会うなーって思うけど」

・・・本当にそうなのだろうか？行くとこ行くとこなんかいる気がするからはっきり言うと疑心暗鬼な状態・・・

「・・・一緒に帰るっていうんなら無理だぞ？買い物行くからよ・・・」

「私もお買い物あったから、一緒に行っていい？」

「・・・好きにしてくれ」

近くのスーパーまで代永と二人で行くことになった。・・・はっきり言う、俺にとっては地獄だ。異性苦手なのによ・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「さ、榊君のとこって結構晩御飯に材料使うんだね・・・」
「・・・週間買いこみだよ、毎日俺が行けって話でさ・・・」

両手に袋を持って歩く俺と、その隣で片手に袋持って歩く代永。実際知らなかったのだが、代永と俺の家は結構近い所にあるらしい。知らなかった訳は、俺は朝一樹んとこ立ち寄ってから別の道通っていくため、だった。帰りも絶対に別々だし。

「お、重く・・・ない？」
「全く重くないって。というかさ、代永が買ったのってトマトジュースと・・・ポテチかよ」
「だって・・・コンソメ味好きだもん・・・」

他愛のない話をしながら堤防沿いを歩いていた時だった。

「・・・見つけたのです、代永咲夜華・・・」

不意に声が聞こえたのは。

「・・・誰？」
「えっと・・・確か同じクラスのリーアフォルテさん・・・だったっけ？」

俺達の後ろに立っていたのは、代永が言うに同じクラスのナタリア・リーアフォルテ・・・らしい。

「・・・なぁ、代永・・・」
「え、なに？」

こそっと耳打ちを始める俺と代永。

「・・・アイツって・・・いたっけ？」
「・・・いたよ？・・・多分・・・」
「さっきから何をだべってやがるのです？」

・・・よくよく考えるとさ、口悪いよな、アイツ・・・

「御託や理由はないのですが・・・代永咲夜華、お前を滅してやるのです！」

・・・滅する！？・・・もしかして・・・

「リーアフォルテ、お前まさか・・・シスターとかそういうのか！？」
「シスターとかじゃないのです。私は祓魔師なのです」
祓魔師？あれ？
「・・・外国人で祓魔師って・・・なくね？」
「・・・えっと、榊君？外国にも祓魔師さんいるよ？」
「マジで？」
リーアフォルテを放置したまま漫才が進む。俺がメインで。
「ごちゃごちゃうるさいのですっ！さっさと私に狩られるがいいのですっ！！」
「え、ええっ！？ってきゃああっ！！」
突然飛んできた十字架を模したナイフをしゃがんで回避（咄嗟レベルで）した代永。
「・・・代永！！「お前は動かないでほしいのです！」・・・なっ・・・！？」

代永の元へ（苦手っつっても心配だから）行こうとしたら、リーアフォルテに制止された。

「面倒なのです・・・！相手は吸血鬼、私も本気を出させてもらうのです！！」

そう言って蹲ったリーアフォルテの背中から、突然バリっという音とともに黒い羽根が生えた・・・っておいいっ！？

「ちょ、羽根！？つか翼！？お前一体何なんだよ！！」

「私は・・・祓魔師であって夢魔なのです！！祓魔の力を持った夢魔、それが私なのです！」

「・・・なんちう矛盾した存在だよお前は・・・」

呆れながらに突っ込んだ俺。リーアフォルテはそんなことはお構いなし、と言わんばかりに翼を広げて・・・

「さっさと・・・死ぬがいいのですっ！！」

「え、あ、ちょ、いやあああっ！！」

リーアフォルテが代永に再び突っ込んだ。今度は爪を伸ばしている。明らかに殺す気だ。

「させるかあああああああああっ！！」

動くな、とは言われたが、そんなことは聞いていられるわけがない！なんでつったってよ・・・

チッ！！

「さ、榊・・・君・・・？」

「・・・動くな、と言ったはずなのですよ？それなのに・・・なぜ・・・なぜそいつを助けるのです！？」

俺は代永を横から突き飛ばした。その時軽く肩を切ったようだが、そんなことは気にしていられない。

「なぜって・・・？そんなの簡単だよ・・・！」

起きあがりながらリーアフォルテに向かって言う。

「ダチを・・・初めてできた女子の友達を！むざむざ殺させるわけにはいかねぇんだよ！！」

そのごっ！　会合、祓魔師の少女（後書き）

「そのさんっ！」から出てた少女の正体は、祓魔の力を持った夢魔でした。ワーお、なんという矛盾した存在・・・

次回は・・・このバトルの決着が。そして敏豪のフラグスキルが発動します！

・・・ところで、吸血鬼って悪魔ととっていいのでしょうかね・・・？

そして答え。

敏豪の名前の元ネタは・・・『ガキの使いやあらへんで！』の総合演出のヘイポーの本名を使わせてもらいました。詳しくは某w先生に。

そのろくっ！　『非』策師敏豪、意思に反して女の子を二人も攻略す（前書き）

６話です、戦いが終わります。そしてヒロイン二人目が確約します。

・・・まぁ、誰とはいいませんが。

ついでに言うと、敏豪リア充の仲間入りおめでとう！な回です。

さらにどうでもよくない話ですが、タグにあるＲ１５は、今回から大きく関与してきます。ま、発言に問題がありますから。

そのろくっ！　『非』策師敏豪、意思に反して女の子を二人も攻略す

「友・・・達・・・」

リーアフォルテは俺の言葉を反芻して動きを止めた。俺は爪か何かが掠った左肩から血を流したまま代永の前に立ちふさがるようにして立っている。

「ああ・・・。そいつが人間だろうとそうじゃなかろうとも、友達と決めたら助けあうってのが当然じゃないのか！？」
「でもっ！そいつは吸血鬼なのですよ！？私以上に人に害を与える！悪魔なのですよ！？」

リーアフォルテの言っていることも分からなくもない。一応被害に遭ったなんて言い方、俺もできるから。けど・・・

「全ての悪魔が害、ということもないだろ！？現に代永が誰かに被害を出したか！？出してないだろ！？」
「・・・っ！」

正論による論破。そこまでとはいわないけど、代永が死んでいいわけないという理由にはなったはず。

・・・しかし、そう思うのがいけなかった。ただの慢心だと思うの

にはそう時間がかからなかった。

「それでも・・・それでも私は・・・っ！！そいつを滅さないといけないのです！父様のためにもっ！！」

突然激昂した、と思ったら突っ込んできたリーアフォルテ。さすがにこのままだとマズい。

「危ないっ！」

「ひゃわああっ！？」

勢い良く飛翔し、代永めがけて突っ込んできたため、代永を抱きかかえるようにして回避。鳥肌？立ってるに決まってんだろ！？下手したら膝だって笑ってるっての！

「くそ、堤防沿いじゃ流石に狭くて分が悪い・・・！広い所に逃げて対策を練らないと・・・！」

「・・・榊君！いい場所があるの思い出した！！」

通過したのを確認してぼやいていたら、代永が急に声を出した。耳元だったからちょっと耳鳴りが・・・

「家の近くの公園なら・・・今の時間帯だったら誰もいないし十分

広いから・・・・！」
「だったら・・・そこまで逃げるぞ！人混みに紛れちまえばあいつもちったあ攻撃しにくくなるはずだから・・・！」

俺が立ち上がった時、代永に異変が起きた。気付かなかったが・・・

「・・・痛っ・・・・」
「どうした！？」
「さっき慌てて避けた時に・・・足捻っちゃったみたい・・・」

左足首を痛そうに押さえる。急襲だったから慌てるのは仕方がない。こうなったら・・・俺も鳥肌立つし代永も嫌がるかもしんないけど・・・

「すまねえ代永、ちょっとばかり我慢してくれ！」
「へ？我慢って何をきゃああっ！？」

代永を抱きかかえて走る。俗にいう『お姫様だっこ』というやつ・・・だったはず。本当にこれしか方法がなかったんだよ、代永を守りながら逃げる方法が！

「絶対に逃がさないのです！！」

リーアフォルテも俺達を追いかける。絶対に捕まるわけにはいかねぇ！捕まったら・・・何のために毎日走りまわらされたのかが分かんなくなっちまうから！！

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

榊君に突然お姫様だっこをされて、助けてもらって・・・

不謹慎だけど・・・ドキドキしている私がいた。

（・・・なんだろ、さっきから榊君があの時の男の子と被って見えちゃう・・・）

あの時の男の子・・・そう、小学校の頃、私をいじめてたクラスメートの子達から身を呈して守ってくれた、とっても優しい男の子。

その時の姿と今の榊君が被って見えて・・・

（やっぱり・・・あの時の男の子って榊君だったのかな・・・）

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

リーアフォルテから逃げ切って・・・な訳がなく、公園までしっかりと追いかけられた。着いたには着いたが・・・正直疲れた。

「逃がさない、と言ったはずなのです・・・！」
「ちったあ妥協してくれると思ったんだけどな・・・」

目的地の公園で対峙する俺とリーアフォルテ。俺は代永を背中に隠したまま・・・。戦うとなると圧倒的に不利。戦う気なんてこれっぽっちもないけど。

「さぁ・・・そこを退くのです・・・！」
「退くわけにはいかねぇんだよ！」
「だったら・・・容赦はしないのです！」

こっちに向かって走り出すリーアフォルテ。それに対して俺は一切動かない。・・・理由は簡単、アイツの『父親の地位への執着から目を覚ます為』に行動するつもりだったからだ。

「・・・代永、ちょっとでも動けるようなら離れてくれ。驚かせるかもしれねぇから・・・」

「え、と・・・なんで・・・？」

俺の言っている意味が分からなくて聞いているような代永（実際分からないと思うが）。

「・・・大丈夫。絶対に護ってみせるから。それに、彼女も傷つけないようにやるつもりだ」

「・・・！」

そして改めてリーアフォルテを見る。走っている＋距離が結構あるため、まだ半分距離を詰められたくらいだ。

「あなたを倒して・・・後ろの悪魔を・・・！」

そしてあっという間に距離を詰めて、俺の方に手を伸ばし・・・

その手を掴んで、体を捻って背負い上げ、その勢いそのままに地面に叩きつけた。

「かはっ・・・」

叩きつけられた反動で、一瞬呼吸が止まるリーアフォルテ。俺がやったのは『背負い投げ』。一樹が何故か突っ込んできた時に反動でやってしまう、本来は柔道の技・・・らしい。

「さ、榊君・・・リーアフォルテさん・・・大丈夫なの・・・？」
「ちょっと勢いはあったかもしれないけど・・・多分大丈夫なはず・・・」

リーアフォルテを見ると、ゆっくりとだけど体を起こしている。が、腕に力が入らないらしく、プルプル震えていた。

「こ、こんな所で・・・負けるわけには・・・」
「・・・ったく・・・」

はぁ、と溜息をついてリーアフォルテの前に行く。鳥肌が立っているのはデフォルトだが、今はそんな事を気にしていられない。俺が今やるべきなのは・・・

パンッ！

「っ！？」

リーアフォルテの目を覚ましてやるだけだ。

「いつまでお前の親父のことを気にかけている必要があるんだよ。お前にはお前の人生があんだろ？お前らしく好きに生きりゃいいんだよ」

「で、でも・・・父様は私のせいで・・・」

・・・ったく、どんだけ頑固なんだよ・・・

「お前の親父の本心を分かってんのか？本当はお前にこんなことをしてほしくない、なんて思ってないか？それに、お前の親父がお前に責任を押し付けてしまうなんてことはしねぇって。」

「・・・」

親がこの心配をしないわけがない。それはどこも同じなはず。子が祓魔師やってるなんていう話を聞いたら心配するだろ？死と隣り合わせだろうから。

「あ・・・」

リーアフォルテの頭に手を置いて、諭す。

「一度お前の親父と話しとけ。ちゃんと話し合えばお互い分かりあ

えるだろうからな」

そして立ち上がって代永の方へ向かった。後ろからリーアフォルテのなく声が聞こえたが・・・実をいうと・・・

「もう・・・限界・・・」

「さ、榊君!?」

異性に触ったりしまくってたから・・・もう・・・ダメ・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

目の前で、私を助けてくれた男の子が倒れてしまった。嫌いな異性に無理に触り続けた結果・・・だと思う。

気を失ってる・・・だけみたい。リーアフォルテさんもこっちに攻撃する様子はないから大丈夫だと・・・思うけど・・・

「・・・なんだろ・・・さっきからドキドキしっぱなし・・・。やっぱり私・・・榊君のこと、好きだったんだ・・・、あの日からずっと・・・」

私は顔が真っ赤になったまま、榊君の頭を膝に乗せた。捻っちゃった足が痛くないように座って。

「・・・ありがと、榊君・・・」

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

あの盛大なバトル＆盛大な失神があったその次の日の朝。

「うーあー・・・だるい・・・」
「お前一体どうしたんだよ・・・昨日代永から『公園で榊君が倒れてるの』と聞いて飛んできたらマジでぶっ倒れてやがるんだからよ」
「聞かないでくれ・・・」

一樹とは部活の関係で校門で別れて、そして玄関で靴を脱いで室内履きに履き替えて出た時・・・

「榊君！」
「よ、代永！？」

急に代永が俺に腕に抱きついてきた。ぎゃああっ！！

「ちょ、鳥肌、鳥肌立つから離れてくれ！！」
「ちょっと話したいことあるから・・・ダメ？」
「ひ、昼でいいだろ！？」
「い、今言いたいの！！」

代永と言いあいをしていたら・・・悲劇は起きた。

ドンっ！

「うおっ！？」
「ひゃっ！！」

俺の背中に突然衝撃が。何が起きたと後ろを見たら・・・

「り、リーアフォルテ！？」
「リーアフォルテさん！？」

リーアフォルテが俺の腰に抱きついていた・・・！！

「話したいことがあるのです。今言いたいのです。私の本心なのです。」

淡々と俺の腰に抱きついたまま言う。い、一体何を!?早く離れてくれないとまた・・・

「私、あなたのことが好きなのです。私に新しい道を示してくれたあなたに惚れたのです」

『っ!?』

突然の告白。・・・って待て!俺めちゃくちゃ困るんだけど!!

「ちょ、待て!いきなり言われても・・・」

「本心なのです!本気なのです!」

「さ、榊君!わ、私の話なんだけど・・・!」

「よ、代永!?」

突然代永が話を切り出した。・・・今度はなんだ!?

「わ、私、あの日助けてくれた男の子が榊君だって昨日分かったの!だ、だから・・・私・・・あの日からずっと榊君のこと想ってたの!!だ、だからはっきり言います!私と付き合ってください!!」

・・・また盛大な告白！？

「親衛隊いないよな！？」

「親衛隊来たら私が黙らせるもん！！」

・・・顔真っ赤にして言っても説得力無いって・・・

「・・・代永咲夜華。お前みたいなちっぱいに私のダーリンを落とすことなんてできないのです」

「ダーリンて・・・俺はお前の夫になった記憶はないぞ！？」

「ちっぱ・・・！あ、あなただって・・・寧ろあなたの方がペッタンコじゃないの！！」

「これだからちっぱいは・・・」

突然腰から離れたリーアフォルテは、制服の袖に手を引っ込めて、ブレザーの中でもぞもぞとし始めた。

そして・・・

「っ！！」

「・・・ちょ、まさか・・・」

突然、というかいきなりだ。いきなりリーアフォルテの胸が大きくなった。効果音的に言うと『バイン！！』とか鳴りそうな勢いで。

「無理やり上からコルセットで押さえていたのです。実際はこんなに大きいのですよ？」
「～～～～～～っ！！」

・・・もう頭が痛くなってきた・・・

「さ、榊君！あんな大き過ぎるのってダメだよね！？」
「ちっぱいより大きい方が好き、のはずなのです。そうですよね？ダーリン？」
「もう・・・好きにしてくれ・・・」

朝から涙が枯れそうな気がした・・・というか不安がさらに倍増した・・・

・・・ひょっとして俺、女難の相出てたりする？

おまけ

「殺せぇ！姫の心を盗んだ愚か者をこの世から消すのだぁ！！」
「「「「ｓｉｒ，　ｙｅｓ　ｓｉｒ！！」」」」

「軍隊かよテメーらはーっ！！」

親衛隊に追い回されることになった。ついでに言うと、代永とリーアフォルテから「名前で呼んで！」と言われたことも、リーアフォルテ・・・いや、ナタリアから「ダーリン」と呼ばれていることもそれに拍車がかかっているようで・・・

「殺せーっ！！」

「「「「ガンホー！ガンホー！！」」」」

「好きでリア充になってるんじゃねえよーっ！！！」

さらにおまけ

同日朝のＳＨＲが終わった後のことだ。

「なぁ・・・敏豪・・・」

「・・・どうしたんだよ、一樹」

「リーアフォルテって・・・リーアフォルテって・・・」

「・・・ナタリアが？」

「まさかロリ巨乳だったとは！！１４５くらいでサイズが見た目でＦだぜ！？」

「・・・確かに俺もそれは思ったけどさ・・・」

「・・・ということで敏豪。リーアフォルテを振って俺にくれ」

「本人の意思は？」

「俺が幸せになれれば無問題！」
「お前最低だな」

そのろくっ！　『非』策師敏豪、意思に反して女の子を二人も攻略す（後書き）

はい、メインヒロインに、ナタリアが追加され、めでたく敏豪はリア充になりました。おめでと羨ましいんじゃこんちくしょー！

・・・すいません、取り乱しました。

次回はキャラの紹介をします。今のところの、ですが。

で、プチアンケート。
先ずは「これ以上ヒロインを増やすべきか増やすべからずか」。
で、増やす場合・・・というか一応増やすなら４人目まで、として
まして・・・

「４人目をどうするか」です。

一応候補は
『ソロモン７２柱、序列１６位・ゼバル』
『ソロモン７２柱、序列３８位・ハルファス』

のどちらかなんです。性格も出来れば案をください。３人目はもう決まってますので。ソロモン７２柱の誰かですけど。

期限は１１月１１日（金）までです。

キャラ紹介なのです　そのいちっ！（前書き）

タイトルは誰の口調なのか・・・察してください。

キャラ紹介とキャラへの適当な質問４つを掲載しました。

多少今後のネタバレ・・・になるかもしれないことが書いてあるので、軽く閲覧注意、ということで。

キャラ紹介なのです　そのいちっ！

榊（さかき）　敏豪（としひで）

県立西条東高校（敏豪達が通っている高校の名前です）1年、コンピュータ部。
成績は可もなく不可もなく、ルックスも普通。どうでもいいが博学。
茶色い短髪（地毛）。身長は１６７．４。
異性と話すことが苦手で、実をいうと近づくのも苦手。昔女子に弄られたのが原因。
性格は優しい。が、結構悪戯好きだったりなどお茶目な所もある。
小学校の頃苛められていた咲夜華を助けている。
割とトラブルに巻き込まれることが多く、別名『仕事請負人』と言われている。因みに本人公認。

桐生（きりゅう）　一樹（かずき）

県立西条東高校1年。サッカー部。
黒短髪。身長は１７０．３。
成績は敏豪と比べると・・・察した方が早いくらい。そして機転がきく。どうしてそれを勉強に生かせないのだろうか・・・
敏豪とは仲が良い。ちなみに・・・性格はちょっとアレ。優しいのにそこが残念。でもイケメン。わお残念。

代永（よなが）　咲夜華（さやか）

県立西条東高校1年。無所属。
成績優秀でスタイル抜群。入学後僅か2ヶ月で親衛隊が出来上がるほど。
容姿は腰までの黒髪ロングで、そこそこ胸がある（D）。身長はぎりぎり１６０（小数点第3位の所に1が付いている）。
正体は吸血鬼（ヴァンパイア）（しかし未熟）。血を吸わなさすぎると倒れてしまう。

性格は優しく一途。そしてアグレッシブ。ついでに嫉妬深い。
実は小学校の頃敏豪と会っており、苛められていた所を助けられて以降ずっと彼のことを想い続けていた。

ナタリア・リーアフォルテ
県立西条東高校一年。無所属。通称ナタリー。
日本人とイギリス人のハーフの女の子で、正体は咲夜華を討滅しようと狙っていた討魔の力を持った夢魔。（父親が討魔士、母親が夢魔という、変わったハーフ。夢魔なのに討魔の力を持っているのは突っ込んだら負け）
口癖は「なのです」「です」。時たま毒舌。
肩までの金髪で、ロリ巨乳（測定した結果、Ｆという結果が出ている）。身長は１４８．３。
「悪魔は討魔されるべき存在」「父親のことを周りに知らせるためには自分が動かないといけない」という考えを持っていたが、敏豪のビンタと言葉によって考えを改めた。
初めて叱ってくれた相手、ということで敏豪が好きになる。咲夜華とはかなり仲が悪い。
ついでに言うと、敏豪に陶酔と同レベルで惚れており、彼のことを「ダーリン」と呼んでいる。ちなみに咲夜華は「ちっぱい」「おまえ」。

モブ共

１－Ｂの皆さん
かなりノリのいいやつら。敏豪が『請負人』ということを知っていて、暗黙のルールを作ったのもやつら。ナタリアのことを「敏豪の嫁さん」という認識を持っており、また、咲夜華のことも「敏豪の嫁さん」と認識している。弄るのもこいつら、助けるのもこいつら、

励ますのも何をするのも基本こいつら。実はいいやつらの集まり。
大半が男子だが。
思考は『リア充？そりゃおめでたいことじゃないか。だったら盛大にいｊ・・・ゲフンゲフン、祝福してやらなきゃな』というもの。
クラスの中に親衛隊はいない。他のクラスの奴がいて、そいつが親衛隊ということはあるが。
ちなみに今現在出てきていないが、今後出てくるのでご安心を。

代永咲夜華親衛隊の奴ら
咲夜華のことを心底好いている変人集団。陶酔レベル。というか崇拝しているのも。
咲夜華のことを「姫」と呼んでおり、彼女を誑かす存在は排除しようとする危険思考を持つ。が、咲夜華には頭が上がらない情けない存在共。
現在のターゲットは専ら敏豪。

キャラへの質問
1．出身は？
「「「「日本（なのです）」」」」
「・・・マジで？」
「マジなのです。父様が日本人で母様がイギリス人なのですよ？ただ、二人が日本で結婚して日本で私を生んだので、私は日本が出身ってことになるのです」
「・・・あれ？名字は？」
「普通なら父様の『夜裂』か母様の『ルナレイヴァ』なのです。けど、母様に問題があってその名字に出来なくて、父様もそれを鑑みて、『リーアフォルテ』になったと聞いたのです」

2．自分の取柄は？
「タイピングだな。一応１０分で１０００文字は打てる」
「スポーツが出来ること。勉強なんてできるわけねーし」
「・・・なんだろ、私の取柄って・・・？」
「ばいんばいんなおっｐ・・・むぐむぐ」
「それ放送禁止用語だからな！？取柄と思えねぇし！！」
「というかそれが取柄って・・・やっぱりリーアフォルテさんってバカなんだね」
「ぷはっ・・・黙りやがれなのですちっぱい」

3．得意科目は？
「「ない」」
「日本史・・・かな？」
「英語なのです」

4．好きな人（ｌｏｖｅ的な意味で）は？
「いない」
「同じく」
「・・・敏豪君。これだけは絶対に譲れないもん」
「ダーリン以外にいないのです」

キャラ紹介なのです　そのいちっ！（後書き）

ナタリアについての補足はここでさせていただきました。

次回は敏豪の苦悩と乙女の（醜い）戦いが勃発します。そして男子勢が悶絶します。別の意味で一樹が泣きます。

とりあえず3人目は確実に出すことにしました。４人目はアンケートの状況で決めます。

３人目は・・・お楽しみに。活発な咲夜華、毒吐きロリきょぬーなナタリアとは違う子です。

そのななっ！　（色んな意味で）死にかけた敏豪、勃発する咲夜華ＶＳナタリ

何で死にかけているのかは・・・その辺は察してください。『みせられないよ！』なことはないので。

あの咲夜華にも不得手がある、ということが垣間見えます。

そのななっ！　（色んな意味で）死にかけた敏豪、勃発する咲夜華ＶＳナタリア

あの朝、咲夜華とナタリアに盛大な告白をされてからというもの、俺は毎日が忙しいものになった。

親衛隊の奴らには追われるようになったし・・・なんか増えたし・・・

その結果・・・

「かゆ・・・うま・・・」

「・・・敏豪、お前、口からなんか出てるぞ・・・」

「し・・・ぬ・・・」

俺は絶賛、太陽光によって干からびたミミズ状態になっていた。仕方ないだろ、休まる場所が家しかないんだから・・・

そして、休まらない理由その２が・・・

「だーりーん♪」

来た。突然告白し、そして俺を何故かダーリンと呼ぶ女、ナタリア

が。

「ダーリン、次は移動教室なのです。一緒に行きたいのです」
「だーっ！ひっつくな引っ張るな抱きしめるな！！止めてくれ鳥肌が立つ！！ついでに言うと暑苦しい！！」

何故暑苦しいかって？現在7月。上旬だけど夏真っ盛り。暑いのは当然だろ？

ナタリアはぐいぐいと腕を引っ張っている。あの告白以来、胸に着けていたコルセットは外して下着を着けたらしく、もろに当たって・・・

「だめーっ！！」
「にゅっ！？」

突然声が聞こえたなー・・・とか思ったら衝撃が。ナタリアが誰か・・・いやまあ、大体予想はつくけど・・・に突き飛ばされて、腕に抱きつかれていた俺もその反動で転げ落ちそうになって・・・

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！？」

一樹の急所に俺の後頭部がクリーンヒット。・・・これは痛い。絶対痛い。しかし俺のせいではない。俺が休まらない理由その3が原

因だ。

「り、リーアフォルテさんなんかに絶対！ぜーったい！敏豪君は渡さないもん！！」

「・・・ちっぱい・・・よくもやってくれやがったのです・・・」

「・・・ちっぱいじゃないって何度も言ってるよね？」

「・・・私から見ればお前もちっぱいに変わりないのです」

・・・もう言い争い。その3は咲夜華だ。もう仲が悪いとしか言いようがないくらいに言い争ってる。内容は専ら胸な気がするが。

「やっぱりリーアフォルテさんは胸ばっかりに栄養いってるんだね、そんなことしか言えないんだもん」

「そういうちっぱいは頭ばっかりに栄養いってるからちっぱいなのです」

足元には急所に俺のヘッドバットが決まって悶絶中の一樹、俺の両腕には只今絶賛言い争い中の『自称・榊敏豪の彼女』の二人。

「・・・どうしたもんかね、これ・・・」

鳥肌立ってるのに気付いて欲しい。しかし気付いてくれない。そんな悲しい状況に、なす術もなく振り回されていた・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

時間変わって３限目。科目は体育（１－Ａと合同）。男子は中でバレーか外で野球。女子は外で全員でソフトボール・・・なのは良いが。

野球をしていた男子、１－Ａのやつらは全員授業にならなかった。
理由は・・・女子・・・の一部。

「・・・な、なあ、見ろよあれ・・・」
「すげぇ・・・ぷるんぷるんしてやがる・・・」

・・・ま、言わずもがな、視線はある一点に集中してる。咲夜華とナタリアの、だ。特にナタリアの方に凄い集中してる。

・・・仕方ないっちゃ・・・仕方ないんだよな・・・。今までは胸にコルセットをして締め付けて小さく見せていたって話だから・・・

「こらお前ら、ちゃんと授業に参加しろー」

・・・うん、先生からお叱り。仕方ないね、うん。ちゃんとしてくれて俺ゃ嬉しいよ。

「いくら代永やリーアフォルテの胸が気になるっていってもだな、さすがに授業くらいはしっかりしろ。終わってからの報酬と思えー」

前言撤回、最悪だこの人。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

女子のソフトボールは、最早咲夜華ＶＳナタリアの構図になっていた。投手はそれぞれ咲夜華とナタリアがやっていた。

咲夜華の投げる球は速度こそないが、コントロールに長けていて、毎度毎度エグイ所（ストライクゾーンぎりぎり）に投げていた。無論、打てるわけがない。見る限りインサイドぎりぎりだからだ。

対するナタリアはコントロールはぼろぼろだが、それを補う速度で投げていた。こっちも打てるわけがない。早過ぎるからだ。

「・・・ちっぱい、お前の球を最初に打つのは私なのです。今度こそ当ててやるのです」
「・・・絶対打たせないからね」

そして、打者ナタリアＶＳ投手咲夜華という構図が三度出来た。今のところはどちらも打ててない。

「せぇ・・・のっ！」
「・・・ここなのです！」

すかっ。

「ストライク」
「・・・今のはボールだったのです」
「完全にストライク。ギリギリだったけど私の目は誤魔化せないよ？」
「むー・・・」

そしてまた投げて、空振って・・・

「ストライク、バッターアウト。ついでにチェンジね」

「むぅ・・・」

とぼとぼと歩いてグローブを取り、マウンドへ。そしてその次の一人目が・・・

「・・・というか、結局バトルなのです。今度は私が勝たせてもらうのです」

「ぜ、絶対に打つもん！」

完全に逆になった戦いになった。・・・こちらも状況は一緒。

「・・・ということで・・・死ぬがいいですっ！！」

「・・・！（キュピン！）」

咲夜華は突然バットを横倒しにした。これが意味することはつまり・・・

こん。

「バント！？卑怯なのです！」
「打てばいいんだもん！打ったもん勝ちだよ！」

やはり策士的な方向では咲夜華に軍配が上がっていた。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

ちなみに男子は・・・

「・・・だ、ダメだ・・・」
「あ、あの揺れる山を見てると・・・」

・・・はっきり言えば、とても体育をやれる状況じゃなかった。

「おーし1－Bメンバー、とっとと3アウト取るぞー」
「OKー。とっとと取って唖然とさせてやるぞー！」
「というか敏豪の嫁さん達をガッツリ見てるとこうなっぞって思い知らせてやるぞー！！」

俺？キャッチャーが一樹だったからとっととバスバス投げてとっとと3アウト取ってるけど？

つか「敏豪の嫁さん達」とか言ったやつ後でシバく。

☆★☆★☆★☆★☆★

昼休み。俺は授業終了のチャイムと共に教室から姿を晦ました。一樹には説明済みだ。逃げるためだと。そして俺は屋上に向かった。

二人には居場所を告げていなかった。いなかったのに・・・

「やっほ♪」

「・・・いたのかよ」

咲夜華がいた。まるで待ってたかのように。

「やっぱりお前がいんのかよ・・・」
「だって、敏豪君がいる所ってここか教室か図書館だもん、お昼食べるならここしかないと思って。あ、そうだ」

突然持っていた手提げ鞄をごそごそとして・・・

「えと・・・お弁当、作ってきたんだ。食べて・・・くれる？」
「弁・・・当？」
「・・・うん」

よく見たら咲夜華の手は所々に絆創膏が貼ってあった。で、開けてみたら・・・

「えと・・・その・・・初めて・・・自分以外の人のために料理したから・・・」
「・・・もしかして今まで作ってたのってトマト料理とか？んで殆ど包丁を使わないものだった？」
「う、うん・・・」

どうやら作るのは専ら具の少ないパスタものらしい。指に切り傷があったのはそのためか・・・

弁当箱の中身は、御世辞にも料理上手、と言えるような状況の物はなかったが、それでもおいしそうだった。

「・・・んじゃ、ありがたくもらうよ。・・・というかお前はどうすんだよ？」
「わ、私は自分の分も作ったから」

と、手提げ鞄をまたごそごそとして、出てきた可愛らしい弁当箱。

「なら大丈夫だな。んじゃ、いただきま・・・」
「そうは問屋が卸さないのです！」

突然ドアが開いたと思ったら、ナタリアが登場。もうやだ・・・

「私だってお弁当を作ってきたのです！！絶対そこのちっぱいよりおいしい・・・はずなのです！」
「なぜそこで詰まった！？」
「・・・私だって初めて作ったのです・・・」

・・・ちくしょう、初めて女の子の手料理食べるけどさ・・・

どっちも料理初心者かよーっ！！

結果、撃沈したぜ・・・。咲夜華の料理は味が濃くて・・・ナタリアのは見た目ですらもうダメだった・・・味？ダメに決まってんだろ・・・

「ちょっとー！敏豪君倒れちゃったよ！？絶対リーアフォルテさんの料理のせいだからね！？」
「何を言いやがりますかちっぱい！！お前の料理が下手過ぎるのが悪いのです！！」

・・・お前ら二人の責任だよ・・・！

そのななっ！　（色んな意味で）死にかけた敏豪、勃発する咲夜華ＶＳナタリ

１－Ａの男子共の行動は、分かると思います。そして１－Ｂのやつらは・・・もう、ね。いいやつらですよ。ノリ的な意味で。

次回は新キャラ増えます。前にも言いましたソロモン７２柱の１柱です（悪魔はよく１匹２匹と数えることが多いかも、ですが、実際は１柱２柱とも数えるそうです。ここでは使い分けますが）。さて、一体どの悪魔でしょうか？それはお楽しみに。

そのはちっ！　臨海研修旅行の話と転校生（前書き）

新キャラが増えます！・・・さて、元悪魔は一体どの悪魔でしょうかね・・・？

そしてタイトルにある臨海研修学校はちょっとしたら出てきます。すぐには出てきません。

そのはちっ！　臨海研修旅行の話と転校生

「ダーリン、嬉しい話とそうじゃない話があるのです」

突然抱きついてナタリアが切り出した。・・・いい話と悪い話？

「いい話から先にくれ」
「いい話は・・・再来週月曜から臨海研修旅行があるのです。盗み聞いた話によるとその間は異性交遊ＯＫだとか」
「どこがいい話だ」
「私にとっていい話なのです」
「・・・で？他にないのか？」
「あとあと、転校生が来るとか。性別までは分かんなかったのです」

転校生・・・もしかしたらもしかしなくても・・・

「・・・どの道悪い話じゃねぇかよ」
「あり？」
「で、悪い話ってのは？」
「夏休み明けに期末テストがあるとのことなのです」
「・・・悪い話しかねぇ・・・」

俺はもう、机に突っ伏すしか取るべき行動がなかった。臨海研修旅行の異性交遊ＯＫだと俺どうなる分かんねぇし・・・転校生つった

ら俺が『面倒見ろ』なんて話になりかねないし・・・テストなんて死亡フラグじゃねぇかよ・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

そして朝のＳＨＲ。俺にとって多分決定的に疲れ果てると思う時間が来た。

「うーい、さっさと席に着けー。ＳＨＲ始めるぞー」

そうして担任が入ってきた。ノリのいい俺のクラスメイト達は軍隊のように席に着いた。・・・はっきり言う、足並みが整っていた。

ちなみに咲夜華とナタリアは俺をはさんだ両隣りだったため、俺を挟んで火花を散らしていた・・・。俺、もしかしなくてもその内心筋梗塞起こしそうな気がしてきた・・・

「うーし、今日は連絡が何個もあるぞーまずは臨海研修旅行の話なー」

ナタリアの話通りマジであんのかよ・・・

「あー、臨海研修旅行の間に恋人同士になっても構わないが、節度くらいは守れよー」

・・・そして異性交遊がＯＫとな・・・

「榊ー、お前もう付き合っちまえよー」
「そうだそうだー！お前もう嫁さん二人いるんだからよー！！」
「ばっ、嫁って！？いねぇよそんなん！！」

タイミングを見計らったかのようにいつもの冷やかしが入った。前

は別のやつだったのに・・・・！畜生・・・

「あー静かにしろー。茶化すなら休み時間にしろー」

そしてアンタは止めないのかよ！！

「んでテストの話もしとくぞー。夏休み明けすぐにあるからなー。範囲は・・・夏休み前に配る。面倒だから」

・・・安定のめんどくさがりあざーす。

「んで、最後の知らせだー。今日は編入生が来た」
「女ですか！？女子ですか！？それとも野郎ですか！？」
「お前らの期待通りだ、安心しろ」

刹那、クラス中が歓喜した。ただ、その内容が・・・

「よっしゃー！榊を思いっきりいじれるネタがキター！！」
「いやいやそこは擁護すべきだろ！？少しずつ教え込んでいって・・・だろ！？」
「どの道榊乙だな！！」

・・・というもの。女子に至っても・・・

「榊君が頑張ってくれるから大丈夫だよね！」
「榊君優しいからねー」
「Ｍｒハーレムだからねー、女の子には優しいからねー」

・・・誰も擁護してくれる人はいなかった・・・

「ダーリンを差し出すわけにはいかないのです！！」
「そ、そうだよ！！敏豪君が何で女の子の面倒を見ないといけないの！？そういうのって委員長の仕事じゃないの！？」

・・・いや、一応いた。弁護にはなってないけど・・・

「とりあえず静かにしろー。うーし、入ってこーい」

指示に従うように、控えめにドアが開く。そして、チリンという鈴の音。

入ってきたのは銀髪が映える女子だった。編入生と言っても外国人っぽい。

「おし、自己紹介しろ」

「はい」

後ろで黒板に彼女の名前を書きながら自己紹介を促す先生と、それに返事をする女子。

「皆さん初めまして、本日付で編入してきましたルナ・ヴェイルフォールと言います。不慣れなところもあると思いますが、よろしくお願いします」

流暢な日本語でしゃべるヴェイ・・・ヴェイルフォール・・・は恭しく頭を下げた。首に鈴付きのチョーカーをしていて、それがチリンと鳴っていたようだ。

・・・あれ？ヴェイルフォール・・・なんかどっかで聞いたことあるような・・・もうちょっと違う聞き方で・・・

「・・・どうしよう、マジ美人だ・・・」

「・・・やべぇ、これマジで誰かフラグ立てんじゃね？」

そういう会話がぼそぼそと始まった。・・・やめてくれ、そういう時は大概俺にフラグ立つから・・・

「つーことで榊ー、今日一日面倒見てくれー」

「なっ・・・・！？」

突然振られ、俺は言葉を失った。・・・マジ！？

「つーことでＳＨＲ終わりー。次移動教室だから遅れんなよー」

「ちょ、ウソだろ！？」

・・・予想が当たった！！嫌な予感ばっかり当たるってこのことだったのか！！

「・・・ダーリン？浮気したら許さないのですよ？」

「浮気て・・・」

「・・・ダメだからね？浮気・・・」

「・・・へいへい・・・」

この時点で俺はもう机に突っ伏すしかなかった。

ヴェイルフォールは『わ、私、迷惑だったかな・・・』と言わんばかりにおろおろしていた。・・・心配しないでくれ、ヴェイルフォールは無関係なのだから・・・

「あ、あの・・・榊・・・君・・・ですよね？」

「・・・ああ・・・」

「その・・・よろしく・・・お願い、します」

「・・・こちらこそ」

横から来る視線が痛かった。ぐさぐさと来るのが辛い。

そのはちっ！　臨海研修旅行の話と転校生（後書き）

次回は・・・『ラッキースケベ羨ましいぞこのヤロー！！』な回です。

この子は・・・一体何の悪魔でしょうか？ヒントは名字に。そこから推測できる人マジすげぇ、です。

そのきゅうっ！　ラッキースケベは唐突に！？（前書き）

今回も、「敏豪このヤロー！！」な回です。ついでに久しぶりに・・・
・ひっさしぶりに！！あいつらが出ます！ちょこっと。

徐々にフラグは立ち始めるものぜよ・・・

そのきゅうっ！　ラッキースケベは唐突に！？

1時間目が終わってから。つか1限目のときは俺と咲夜華とナタリアで面倒を見ることになった。元々俺が面倒を見ることになってたのに、二人が「二人きりにさせたくない！！」と断固拒否してこうなった。

「えと・・・次は・・・音楽・・・？」
「音楽室・・・確か・・・うわ、魔の階段地帯通らないと遠回りになるし・・・」
「魔の・・・階段地帯・・・？」

ヴェイルフォールが「何それ？」というふうに聞いてくる。仕方ないか、来たばかりだから知らないわけだし・・・

「・・・嫌な所だよね、あの階段・・・」
「絶対転びそうになるのです・・・。下手したらスカートの中見られちゃうのです・・・」
「えっ！？」
「・・・あの階段、傾斜が強いんだよな・・・。ふつう12～3段なのにあそこだけ設計ミスってか17段あるんだよな・・・」

魔の階段地帯・・・この西条東高校の実在する伝説として知られている、音楽室のある3階へと通じる階段。あの階段の怖いところは・・・女子にとっては段数の多い階段だからスカートの中が見られて

しまいかねない、ということ。共通している所というのが・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・来た、魔の階段地帯・・・」

「え・・・と・・・これは・・・階段・・・なんですか・・・？」

「階段だ。やけに斜めった、な」

そう、１段１段の角度が９０度じゃなくて６０度なのだ。踏み場自

体に傾斜がついてしまっている。それでよく生徒が階段を踏み外したりして転んでケガをしているっつー話。

「どうやら私達が最後尾なのです。ダーリン、もし転んだ時に私たちを助けて欲しいのです」
「つーことは俺が一番最後に登れって・・・・？」

つーことは・・・うーわ、俺上見れねぇ・・・・

「敏豪君、もしもの時は助けてね？」
「・・・わーったよ、どうにかするよ」
「お、お願いします・・・」

ナタリア、咲夜華、ヴェイルフォールの順で登ってく。俺は最後、全員が登り終わった後に登ることに。・・・やーな予感。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

ナタリアが階段を上がりきり、咲夜華も登り終えた頃。ヴェイルフォールはまだ半分も登っていなかった。やっぱり初めてだと怖いんだろな・・・

「ん・・・しょ・・・ひゃっ！？」

・・・今の声、まさか・・・

「だ、ダーリン！編入生が足を滑らせたのです！！」
「ど、どうにか・・・どうにか止めてあげて！！」
「というかちょっと待て！！体勢的に無理だろ！？」

バランスを崩し、俺に向けて倒れてくるヴェイルフォール。しかも・・・うつ伏せ・・・つまり俺と正面衝突する形で・・・

「きゃああっ！！」
「うおおっ！！？」

衝突、そして一気に踊り場まで。・・・そしてついでに頭を打った。
・・・痛い。

「ダーリン、だいじょぶなのです！？」
「敏豪君！ヴェイルフォールさん！！」

・・・二人が声をかけている・・・少なくともヴェイルフォールには何もないはず・・・

「っ！？」
「・・・む～っ！？」
「あーっ！！」
「だ、ダーリンにな、何をしてるのです編入生！？」

・・・偶然。超偶然で。キスしていた。ヴェイルフォールと。・・・
やばい、鳥肌が・・・なんかもう、つーか寧ろ・・・

心臓が痛い・・・

俺は上に手を上げ、数秒助けを求めるが如く天を握って・・・その
まま・・・気を失った・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「ダーリン!!気を失ったら負けなのです!!」

「ヴェイルフォールさん退いて！敏豪君気を失ってる！！」
「はひゃいぃっ！！」

急勾配の階段をものともせずかけ下りてくる咲夜華とナタリア。凄い勢いで降りてくる二人の気迫に圧され、すぐに退こうとしたルナだったが・・・

「あっ・・・つぅ・・・」

右足首を抑えて蹲った。

「編入生、もしかして足捻ったのです？」
「そ、そうみたい・・・です・・・いたた・・・」

さっきの転落の時だ。足を滑らした瞬間が悪かったらしく、捻ったらしい。

「・・・しょうがないのです。授業に遅れるのを覚悟して保健室まで連れてくのです」
「そうだね。事故だから仕方ないし、説明したらわかってくれるかもしれないね」

咲夜華とナタリアが一階まで敏豪を下ろし、脚を捻ったルナにナタ

リアが肩を貸してゆっくりと一階まで向かい、そこから二人でまた敏豪を担いでいって、ルナはひょこひょこと保健室まで二人について言ったのだった。

☆★☆★☆★☆★☆★

「あなた達は授業に行きなさい。彼なら大丈夫だから」
「で、でも！」
「ダーリンに何かあったら私・・・」
「そんな大事に至ることなんてないから」

咲夜華とナタリアが保健室の先生ともめていた。理由は単純、敏豪のことである。残っているルナに何かしないか、とか逆に何かされないか、など、過剰に心配していたのだ。

「わ、私は大丈夫ですから・・・何もしませんし何もされませんから・・・」

ルナの説得で渋々授業に向かった二人。・・・何となく納得はしていないのは編入したてのルナですら把握できた。

「ヴェイルフォールさんも、授業に行くのはちょっと様子を見てからにしてね。・・・あぁ、そういえばちょっと用事があったので先生抜けるけど・・・いい？」
「ああ、はい。大丈夫です」

ルナを保健室に残して、先生は行ってしまう。一人残ったルナは、ベッドで今も気を失ったままの敏豪を看ていた。

「・・・」

だが、それもほんの数分だった。突然顔を赤くして俯いたのだ。その理由は・・・

（お、男の人の唇って・・・柔らかかったんだ・・・はぅ・・・）

さっきのキスを思い出して・・・その感触をも思い出してしまっていて、だった。

（・・・私ったら何考えてんだろう・・・！！）

頭をぶんぶんと振ってさっきのキスを忘れようとするルナ。けど忘れることは難しく。

「・・・あ、布団がずれてる・・・。直さなきゃ・・・」

歩くことがままならないため、立ち上がって奥の方の布団のずれを

直し始めるルナ。ただ・・・

「と・・・どかな・・・い・・・っ！」

片足でグーッと体を伸ばしているが、ぎりぎり届くか届かないか、の位置。

「ちょっと動いて・・・ん～っ！！んん～っ！！」

ギリギリ届いた！と安堵したその時だった。

「うわああっ！？」

突然敏豪が飛び起きたのだ。運悪く体を伸ばしていた時だったため、案の定・・・

ふにょん。

「ふひゃんっ！？」

ルナの胸へと顔面ダイブしたのだった。その瞬間力が抜けたルナは敏豪の顔を覆うように倒れこんでしまう。結果・・・

「むぐうぅぅぅっ！！」

見事に敏豪の呼吸する穴全てを塞いでしまうのだった。

「・・・あ、ご、ごめんなさいっ！！」

慌てて敏豪の上から飛び退く（とはいっても慌てて椅子に座り込むだけ）ルナ。

「・・・悪い、俺も飛び起きたから・・・」

「う、ううん・・・」

その後はお互い気まずい雰囲気が残っていた・・・

おまけその1

授業終了後のこと。

「だ――――――――――――――――――――り――――――――――――――――――――――
―――――――――ん!!!」

シパァン!と、ドアを壊しそうな勢いでナタリアが飛び込んできた。
少し遅れて咲夜華も入ってくる。

「な、何もされてないはずなのです!何もされてないですよね!?」
「何もしてないよね!?そうだよね!?」
「なにもしてないから!!天地神妙に誓ってしてないから!!」
「・・・!!」

敏豪とルナは同時に否定。息ぴったりだったのが咲夜華・ナタリアの疑惑を深めているのには気づいていなかった・・・

おまけその２

「榊敏豪ぇっ！！今こそ貴様の息の根を止めてくれるうぁっ！！」

変に巻き舌をして親衛隊が入ってきた。保健室にである。ルナはそれに驚いていたが、敏豪は「またか・・・」と言わんばかりに呆れていた。

「お前らなぁ・・・ここ保健室だぞ？病人いたらどうするんだよ・・・」

「お前を殺す為なら無問題だぁっ！！」

そして乱入してくる親衛隊。しかし・・・

「だ、ダメですっ！！」

ルナが痛む足を押してまで立ち上がり、敏豪の前に立ちふさがった。

「退きたまえ麗しい姫君！！そこの害虫を排除しなければ我らが姫は解放されないのだ！！」

「害虫とか言うのはダメですっ！それに、もし排除したら代永さん

が寧ろ皆さんを嫌いますよ!?」

ルナの正論に親衛隊は「ぐぅ・・・」と言うしかなく、引き下がった。

「榊敏豪!今日はこれくらいで退いてやる!だがこれで済むとは思うなよ!!」

そのきゅうっ！　ラッキースケベは唐突に！？（後書き）

久しぶりに出ました親衛隊。キモさは如何でしょうかね？ルナですら「姫君」と呼称するあいつら。そして相変わらず敏豪に対して敵視をし、あまつさえ「害虫」呼ばわりと来たもので。

次回はついに・・・！ルナの正体が明らかになります！・・・とはいっても大体予測つく人はつきますけどね。

アンケート、まだ受け付けてます。内容は
1．４人目を追加すべきかせざるべきか
2．（追加すべきと答えた人は絶対）
その４人目は次のうちどっちがいいか
a．ゼバル（ソロモン７２柱序列１６位）
b．ハルファス（ソロモン７２柱序列３８位）
3．（これは自由・・・というか募集）４人目を追加することになった場合、そのキャラはどんなキャラがいいか（つまるところ設定です）

です。期間は今週の金曜日まで。日曜日辺りに発表します。

そのじゅうっ！　明らかになった編入生の正体、追ってきたソロモン序列1位の

タイトルくっそ長いのは気にしないでください。

タイトルで分かると思いますが、バトル勃発します。相手は・・・

タイトルで見てください。

ついでに後書きで補足入れます。

そのじゅうっ！　明らかになった編入生の正体、追ってきたソロモン序列1位の

ヴェイルフォールが転んで落ちてきたり咲夜華やナタリアがかなり大袈裟に騒いだその日の放課後。

「・・・珍しく部活が休みになったし、今日は久しぶりに本屋でも寄ってから帰るか」

咲夜華は用事があってさっさと教室を出て行ってしまい（かなり落ち込んでいたが）、ナタリアも買い物に行かないといけないとのことで帰った。つまり、実質今は俺一人。

「・・・久しぶりだな、一人ってのも」

一人、商店街の方へと歩いて行った。この後、大変なことになるとは思いもしなかった・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「今日もいろんな事があったなぁ・・・」

帰り道、ルナはぼそっとそういうことを呟いた。編入生としてクラスに入った途端、いきなり騒ぎだしたクラスの皆。困っているよう

に見えるけど、優しく接してくれた榊君。その榊君が好きで好きでたまらないなんて言葉が似合うくらい榊君が好きな代永さんやリーアフォルテさん。いろんな事があったな、としみじみ思った。

（でも、楽しかったなぁ・・・。明日もまた、何かあるんだろうなぁ・・・）

そんな事を思いながら歩いていたその時だった。

『・・・ようやく見つけたぞ、ヴァレフォール・・・』
「っ！？」

突然聞こえた声に立ち止まって周りをきょろきょろと見渡すルナ。その顔には驚愕の色が。

『何故正体を知っているのかって顔をしているな・・・？当然だろう？同じソロモン王に封ぜられた者同士なのだからな』
「あなたは・・・誰ですか！？」
「・・・ふん、この声を忘れたとは言わせぬぞ・・・『盗賊公爵』ヴァレフォールよ・・・」

通りの陰からぬっと現われた男。一瞬ルナは誰か分からなかったが、自身の異名を言われ、ハッとする。

「あ、貴方は・・・『魔王』バエル・・・・！？」

細身の男を見て、怯えてしまうルナ。何せ、目の前にいたのは悪魔の中でも最上の存在、『魔王』バエルがいるのだから。

「ようやく思い出したようだな。・・・二度目の転生で性別を変え、三度目では威厳すら捨てた・・・嘆かわしいことよ」
「わ、私は・・・ヴァレフォールの血を引くだけの存在で、生まれ変わりなどでは・・・！」
「右脇腹。そこに右上の欠けたダビデの星があるはずだ」
「っ！！」

自分が徹底的に隠してきた秘密をあっさりと的中され、驚愕が顔に浮かんでしまう。

「・・・やはりな。二度目の転生を果たした貴様に、我は心を奪われてしまった。盗賊公爵と呼ばれるだけあると思った瞬間だった。・・・さあ、我の妾となれ」
「い、嫌です！誰があなたと結婚なんか！！」

足が痛むのを堪え、一歩一歩確実に下がるルナ。

「そうか・・・。ならば・・・」

右手を空へと上げる。瞬間、その手に空間が湾曲したような球体が現れた。

「今一度・・・心を折られ我に服従するがいい！」

それをルナへと向けるバエル。

（あれは・・・闇の炎！？あれに当たったらいけない・・・！）

咄嗟に避けようとした・・・が、ここでルナに異変が。

「あっ・・・っつ・・・」

捻った右足を忘れて走ろうとしたため、転んでしまう。そして迫る炎。避けることもできず・・・

「きゃあああああっ！！」

闇の炎を直に浴びてしまう。そして吹き飛ばされてしまい、地面を転がる。

「無様だな、盗賊公爵。威厳どころかその動きすら失ったか」
「う・・・ぅ・・・」

立て続けに闇の炎を浴び、転がされるルナ。最早されるがままだった。

（・・・誰か・・・助けて・・・！）

今のルナには、誰かの助けを願うだけしかできなかった・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「ちくしょー、売り切れって聞いてねぇよ・・・」

欲しかったライトノベルは売り切れ、漫画も次回入荷が未定という散々な事態だった。

「・・・これ以上は何もないだろうし・・・ってなんだあの焦げ跡？」

遠目に焦げ跡を見つけた。しかも車が急ブレーキをかけたような跡じゃない。火を着けたその後・・・みたいな感じの。

『・・・ぁぁ・・・っ・・・』

「・・・声？」

うっすらとだったが、声が聞こえた。それが誰のかは聞こえないが、何か大変なことが起きているのだろうと思う。画、下手にかかわる

のもな、と思った俺は放置することにした。

「・・・帰るか」

と踵を返した時だった。

「きゃあああっ！！」

突然目の前に人が飛んできた。・・・よく見ると・・・同じ学校の制服。所々焦げ、燃え尽きてか下着が見えている部分もあった・・・

「お、おい！大丈夫か！？」

同じ学校、ということで思わず声をかけた。長い銀髪、真っ白な肌・・・もしかして・・・

「さ・・・榊・・・君・・・？」

「ヴェイル・・・フォール・・・！？一体・・・一体どうしたんだよ！？」

「に・・・逃げ・・・て・・・」

ヴェイルフォールの口から発せられた「逃げて」の言葉。その意味

が分からずいた時だった。

「ほう・・・人間風情が此処にいるとはな・・・」

傲慢な、他人を見下したかのような声が聞こえた。

「てめぇ・・・誰だよ！？」

「人間風情に名乗る名などないわ。我はそこの女に用がある。今すぐ消えろ」

さっきからアイツの言葉に混じっている『我』とかの偉そうな言葉。もしかしたら・・・

「てめぇも悪魔か・・・！」

「・・・ふん、貴様のような人間が悪魔を知っているとはな・・・。落ちぶれたものだ、存在を知られるとは・・・」

やっぱり・・・そうだった・・・

「特別に名を教えよう、人間。我が名はバエル、ソロモン72柱の序列1位にして魔王。そこいらの一辺倒の有象無象とは一線を画す悪魔ぞ」

ソロモン72柱序列1位・・・こいつが狙っているのはヴェイルフォール・・・やっぱりそうか・・・！

「・・・ヴェイルフォール・・・お前はやっぱりソロモン72柱序列6位のヴァレフォールか・・・！」

「・・・」

ゆっくりと、だが確実に顔を背けた。その行動で分かる。当たりだと。

「学友が悪魔、しかも序列6位という存在。絶望しただろう？そのような存在が学友とは思うまい？」

バエルは俺にヴェイルフォールの本性を告げる。明らかに異端視しろ、嫌えと言わんばかりに。しかし、俺は自分の中に怒りがふつふつと沸いてくるのが分かった。そのことを黙っていたヴェイルフォールにじゃない。俺が今キレたいのは・・・

「悪魔だからなんだってんだよ！」

「・・・？」

目の前の不遜な態度しかとれない野郎に、だ。

「ほう・・・？人間如きが我に意見するか」
「だ、ダメ・・・・です・・・！逃げて・・・・ください・・・！」
「・・・ヴェイルフォール、お前が悪魔だって関係ねぇよ。どんなやつだろうと、同じクラスのやつはクラスメートなんだからよ」

ヴェイルフォールに言い切る。俺の周りにも悪魔はいる。だが、普通に学生やっている。例えソロモンの悪魔だといっても、一人の女子なんだから・・・

「だから・・・・」
「・・・む？」

ゆっくりと立ち上がる。そして・・・

「絶対に・・・ヴェイルフォールを守ってやる！テメェは・・・俺が殴って二度とヴェイルフォールに近づけられないようにする！！」

バエルに盛大に啖呵を切った。

「・・・面白い、人間風情が我に戦いを挑むか！」

バエルと対峙。やっぱり序列1位だけあって威圧は半端ない。だが・

・・負けられない・・・・！ヴェイルフォールのために・・・・！

「テメェには・・・ぜってぇ負けねぇ！！」

「我に歯向かうこと、それ即ち愚ということを、その身を持って思い知るがいい！！」

そのじゅうっ！　明らかになった編入生の正体、追ってきたソロモン序列1位の

次回は敏豪ＶＳバエル回です。ボロボロになっても立ち向かう敏豪に、ルナは何を思うのか？

アンケート、まだまだ受け付けてます。感想もお願いします！！

ついでに補足。
ソロモン序列1位のバアルは、バエルとも呼ばれており、今回はその呼び方を使わせてもらいました。「果敢、復讐、決意、高慢、野望、恥、感性、聡明」を司る魔王です。

ソロモン序列6位のヴァレフォルはヴァレファールやヴァラファールなどとも呼ばれるため、ヴァレフォールという呼び方を使わせてもらいました。「盗賊公爵」の異名をもち、「 格闘技、謀り、失意、悲しみ、物品の欠乏 」を司る堕天使です。

そのじゅういちっ！　人間ＶＳ悪魔　力失いしか弱き少女は何を思う（前書き）

今回は敏豪ＶＳバエル回です。後で正式にタグを直しておきます。
「バトルあり」と。

あとルナの本性、「ヴァレフォール」についてですが、時々「ヴァルフォーレ」となっている個所が何箇所か見受けられると思います。
完全にタイプミスなので、見つけたらご指摘ください。

そのじゅういちっ！　人間ＶＳ悪魔　力失いしか弱き少女は何を思う

「だ・・・ダメ・・・！榊君・・・！あなたじゃ・・・勝てっこ・・・ありません・・・！」

敏豪の後ろでルナがか細い声で制止をかける。・・・けど、敏豪は止まる気にはなれない。寧ろ、なるつもりがない。

「ぜってぇ・・・殴ってやらあああっ！！」

勢いをつけてバエルの顔面に拳を振るう。だが、それを片手ではじいたバエルは・・・

「愚かな・・・。無駄な足掻きと知るがよい」

はじいたその手で指を弾く。いわゆるデコピン。しかし悪魔、それも魔王の一撃は重く・・・

「がっ・・・！！」

敏豪は軽く吹き飛ばされてしまう。地面に着いた所からまた転がる。

「榊君！！」
「ふん、人間風情が出しゃばるからこうなるのだ」

吹き飛ばされて本来ならそこで諦める。それが普通の人間。相手が異形の存在なら、それに畏怖し、怯えてしまうもの。しかし・・・

「・・・誰が・・・これで諦めるかよ・・・！」

敏豪は立ち上がる。今の彼はクラスメイトを守りたいっていう気持ちだけで動いていた。

「・・・ほう」
「っあああああああっ！！」

そうしてまた走って突っ込んでいく。

「無駄な足掻きを」

突っ込んでいってはデコピンで吹き飛ばされ、それでもまた突っ込んでいく。何度でも立ち上がっては吹き飛ばされ。

まるでボロ雑巾のように転がされ、各所から血を流し、埃塗れにな

りつつも立ち上がる。

ルナはそれをただ見ることしかできないのが辛かった。今の彼女には彼を助ける力もない。二回目の転生の時にバエルと対峙した際に『辛うじてバエルを退けた』力もない。それが辛かった。

「まだ・・・まだぁっ・・・・！！」

「・・・人間、何故貴様は立ち上がり、我に歯向かう？」

「なぜって・・・そんなの決まってんじゃねぇかよ・・・！」

敏豪は口からプッと血を吐き出し、フラフラになりながらも立ち上がりバエルを睨みつける。

「クラスメイトだからに決まってんだろ！？」

「クラスメイト、か。たかがその程度の繋がりだろう？その程度の繋がりで何故貴様は我に歯向かう？」

「その程度・・・だと・・・！？たかが繋がり・・・されど繋がり・・・だよっ！！」

敏豪はもう一度突っ込んでいく。それが無謀だと分かっていても、今の彼を止めることなど出来ようか。

「・・・ふん」

今度ばかりは叩きつけるような雰囲気の一撃を放つバエル。しかし、今度は違った。

「うらあぁっ！！」

敏豪「が」振り下ろされた腕「を」打ち上げたのだ。魔王の一撃を込められた腕を弾いたため、既に右手は悲鳴を上げていた。それでもなお、敏豪は悲鳴を上げた右の拳を振るった。

「・・・っらあっ！！」

その拳はバエルの顔に一撃入れるには至った。が、当の本人の右手はもう、振るうこともできなくなっていた。

「・・・貴様・・・我に触れるかっ！！」

激昂したバエルは敏豪の腹部に一撃を入れる。敏豪にとってそれは普通の人間に殴られたそれよりも強い力で殴られたもので・・・

「あ・・・が・・・」

反動で呼吸困難に陥ってしまう。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・」

私は何も言えなかった。「クラスメートだから」という理由だけで勝ち目もない相手に立ち向かう榊君に。

（・・・どうして・・・どうして悪魔の私のために・・・ボロボロになるの・・・？）

そして、榊君がバエルを一回殴った。・・・その直後・・・

「・・・っ！！」

榊君のお腹に重い一撃が決まってしまう。

「さ・・・榊君！！」

うずくまる榊君に、私はただ声を上げることしかできない。・・・辛い。これしかできないということが辛い。

「もう・・・もう止めてください！これ以上・・・これ以上は・・・榊君が・・・死んじゃいます・・・！！」

（私が・・・私が自分を捨ててしまえば・・・それで榊君が助かるなら・・・）

「私・・・あなたに・・・」

「・・・何を言われたかしんねぇけどよ・・・！」

榊君がまた立ち上がる。そんなボロボロなのに・・・！

「悪魔だからって・・・誰かに運命を決められるもんじゃねぇだろうよ・・・！！バエル・・・テメェがヴェイルフォールの行動を・・・心を縛る権利なんて・・・ねぇんだよ！！」

「・・・！！」

榊君の言葉に、心がとくんと鳴ったような気がした・・・

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「・・・興醒めした」
「なっ・・・・」

目の前でバエルが言ったこの一言。あまりにも嘗められたような気がした。

「これ以上やり合っても無駄だ。我に貴様は勝てぬ。しかし貴様は我に歯向かい続ける。それに我は興醒めした、と言っているのだ」

バエルは踵を返す。

「ヴァレフォール。貴様は自由に生きるがよい。威厳も力も失い、ただの女となり果てた貴様に、我は興味を失った。好きに生きて好

きに死ね」

そうして、バエルは去っていった。

「・・・へっ・・・やって・・・やったぜ・・・！」

立ち上がったその直後、ふっと力が抜けてしまう。

「・・・っとと・・・」

「さ、榊・・・君・・・その・・・あの・・・」

横にいたヴェイルフォールが足を縺れさせて座り込んでしまう俺におずおずと話しかける。

「私・・・悪魔なんですよ・・・？それもメデューサとかサキュバスなんて目じゃない・・・ソロモン72柱の序列6位の・・・悪魔なんですよ・・・？なのに・・・なんで・・・」

「・・・さっきもいったろ？」

無理矢理だけど、笑顔で言う。

「クラスメイトを守るのに理由がいるかよ？」

そのじゅういちっ！　人間ＶＳ悪魔　力失いしか弱き少女は何を思う（後書き）

次回はこの戦いの後日話です。ルナをバエルの手から守った敏豪。彼は一体どうなるのか・・・？ルナは一体どうなるのか・・・？このことを一切知らない咲夜華とナタリアは発狂するのか・・・（マテ）

アンケート、まだまだ受け付けてますので、感想にどしどし書いてください！キャラ案も貰えたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8224x/

恋する乙女は悪魔っ子！？

2011年11月10日02時12分発行